

# 平成29年度 自己評価・自己点検

## 1. 教育理念・教育目標

### 《教育理念》

一人ひとりの幼児が、夫々の発達課題に則して、自己の能力を十分に生かし、価値のある人生を送ることができるように、神を敬い、他の人々と親しみ合い、身近な自然に対する豊かな感性を磨くよう、指導と援助を与えて、幼児の健全な園生活を図る

### 《教育目標》

明るく逞しく、心豊かで、調和のとれた円満な人間性の基礎を育む

園の教育理念・教育方針の理解	○園の創立理念・建学の精神にあるキリスト教理念を理解している	78→79→92
	○カトリック園としての教育方針に共感している	81→100→100
	○園の方針、園長の考えについて園長や教職員と話し合っている	56→59→71
	○園の目指す幼児の姿を具体的にイメージできる	74→82→83
	○教育目標が現代社会の要請や必要に応える内容となるよう努力している	78→78→79
幼稚園教育要領の理解	○幼稚園教育要領を理解し、生かしている	67→71→67
	○幼稚園教育要領について、園長や教職員と話し合っている	48→44→50
	○幼稚園教育要領について、幼児の姿や環境の構成、教師のかかわりなど具体的な事例を想起できる	67→71→71

## 2. 年間目標

年少「教師や友だちと親しみ、安心して過ごす」

年中「さまざまな活動に意欲的に取り組み、ともに育ち合う」

年長「自分で考え、自ら正しいことを選択して行動する」

### 3. 学級経営のためのクラス別自己点検・自己評価

評 価 項 目	達成率
① 子どものことについて常に教師間で話し合い、クラス・学年の枠を超えて情報を共有し、クラスの出来事や保護者からの様々な要望、意見については園長や主任、学年主任等に報告、連絡、相談をしているか。	89→82→88
② 子どもの健康で安全な生活を保障するために、施設・設備等の安全点検・衛生管理を定期的また随時行い取り組んでいるか。	78→55→79
③ 一人ひとりが神に愛されている意識を育て、家庭の事情・国籍・能力などでの差別を植えつけないような配慮がなされているか。	93→71→96
④ 一人ひとりの子どもが、友だちとふれあい、お互いの良さを認め、安定感を持って人間関係が育つような保育がなされているか。	81→71→75
⑤ 子どもや保護者との対応には公平さを欠かないようにし、一人ひとりの子どもの内面をより深く理解するように努めているか。	85→78→88
⑥ 絵本や物語などに親しませ、想像力やことばに対する感覚を大切に育てているか。	93→75→92
⑦ 教師が各々の得意分野の能力を生かし、その育成につとめ、教師間の良さを生かし合って信頼と協力が築かれているか。	81→85→88
⑧ 明るく爽やかに挨拶をこころがけ、正しい日本語・ていねいなことばで語りかけ、相手の話も耳を傾け、最後までしっかりと聞いているか。	70→64→75
⑨ 研修会には自己課題を持って、事前にその内容を確認したり、自分なりの考えをまとめ、保育に生かせるような成果を出しているか。	78→51→63
⑩ 保育の専門知識や技能のほかに、趣味や読書・ボランティア活動等、社会的な環境にも目を向け、人間性の幅を広げる努力をしているか。	56→59→67

#### 4. 重点的に取り組む項目の達成及び取組状況<年少児>

##### 《重点目標》

子どもたちが遊ぶ中で感じた思いに共感し、働きかけていく

評価項目	達成率
① 自分の保育と計画の評価・反省を行っている	67→75→67
② 障害のある幼児も共に生活する保育環境を用意している	74→89→88
③ 食事を楽しむことができる配慮や工夫をしている	85→85→75
④ 幼児の話をよく聞いたり、ことばにならない思いやサインを受け止めるようにしている	85→82→88
⑤ 幼児同士のかかわりの中で、その姿の内にある心の動きにつても推察するようにしている	67→71→83
⑥ 幼児のささやかな成長が理解できて、それを喜ぶことができる	100→96→100
⑦ 一人ひとりの幼児をよく観察するように心がけている	81→75→79
⑧ 楽しい雰囲気の中で安定して遊びこめる環境構成をしている	67→89→71

##### ○取り組み状況

・友だちへの関心が高まり、誘い合って複数人で遊ぶ姿が多く見られるようになってきたので、鬼ごっこや家族ごっこなど、集団で遊べるようにしてきた。

・参観日で作った「動物釣りゲーム」を十分に遊ぶ時間を取れないまま、その日のうちに持って帰ったので、部屋で遊べるように縮小版を用意した。友だちどうして繰り返し遊ぶようすが見られた。

・学年で取り組む行事が増え、援助を必要とする子どもたちへの手立てを考え、その子をとおしてまとまりのある集団づくりを心がけていた。教師どうしのサポート態勢がしっかりとしてきたと同時に、子どもたちの成長をともに喜び合う先生方の会話が増えていった。

・教師と子ども、子どもと子どもという関係のなかで、集団のなかでの自分の姿も意識できるようになりつつあると思う。教師が丁寧に一人ひとりに関わっていることが、子どもたちにも伝わっているのであろう。

・園生活に慣れてきたことから、身の回りの動作が雑になってきたので、できるようになった事は認め、改めて丁寧にすることができるように配慮してきた。

・自己表現ができるようになり、思いを伝え合う姿が見られ、遊びも楽しさを増しているようだったが、話を聞く、受け入れる、認め合うところまでは難しいようなので、援助が必要な場合は一緒に考えられる時間をつくってきた。

・音楽会の役割分担では、一人ひとりの負担にならないよう、しかしやる気が持てるよう配慮した。自分の力に自信を持ち、最後まで頑張りぬき、満足そうだった。

・障害のある幼児と教師の関わりを見て、周囲の子どもたちが自分なりの手助けの仕方を考え、実行でき、成長を感じた。

・友だちと遊ぶ姿がたくさん見られた。友だちと遊ぶ楽しさを知り、進んで「入れて」と声をかけるようすから成長を感じた。

・一人遊びから友だちと遊ぶことの楽しさを知り、誘い合いながら遊ぶ姿が見られるようになっている。戸外遊びでも、年中・年長の遊びを真似するようになり、体を大きく使って動けるようになってきた。友だちどうしのトラブルも増えているが、先生に伝えに来るなど、自分たちだけでは解決できないことを、教師に伝えることで、安心して生活できている。

・一人ひとりの子どものようすを、もう少し深い視点から観察し、寄り添いながら伸ばしてあげられるところを見つけ、援助をしていければよかったと思う。

・障害のある幼児とともに生活していくなかで、周囲の子どもたち自身が気づいてできることをしようとする姿が見られるようになってきている。

・1つの遊びをじっくり遊び込めるまでの時間が取れなかったこともあるので、活動内容や時間配分なども考えていきたい。

・教師が遊びの中に入り、広げるヒントを見つけ出して誘ってみればよかったとも思われる。

・支援を要する子どもに対して、職員間で連携を取って、行事にスムーズに参加することができていた。子どものようすについても日々話題に出して、他の学年の職員とも共通理解しようとしていた。担任不在のときに隣のクラスの職員がカバーする様子が見られ、学年としてのまとまりを感じた。

5. 重点的に取り組む項目の達成及び取組状況<年中児>

《重点目標》

友だちの気持ちに共感し、相手を受け入れ認め合う

評 価 項 目	達成率
① 楽しい雰囲気の中で安定して遊びこめる環境構成をしている	85→82→96
② 個人の発達の特徴、発達の課題に応じて指導している	85→89→92
③ 一人ひとりが安定感を持ち、友だちと協力したり、思いやったり、助け合 って生活できるようにしている	78→85→75
④ 生活や遊びの中で、ことばでやりとりしたり、ものを知ったり、考えたり することなどに配慮して指導している	74→78→75
⑤ 幼児同士のかかわりのなかで、その姿のうちにある心の動きについても推 察するようにしている	67→82→83
⑥ 幼児一人ひとりのありのままの姿を受け入れようとしている	93→89→100
⑦ 幼児同士のトラブルに対し、適切な対応をしている	81→82→79
⑧ 幼児のささやかな成長が理解できて、それを喜ぶことができる	96→89→92
⑨ 自然に対する感性を持ち、命の尊さを感じている	70→78→71
⑩ 幼児の発達、育児等について保護者と共通理解を得るよう努力している	67→82→88

○取り組み状況

・音楽会の役割分担を子どもたちの希望を聞きながら決めたことで、一人ひとりが責任を持って自分の役割を果たすことができた。

・学年全体で体を動かしたり一緒に遊ぶ機会を作ったりして、多くの友だちと触れ合える工夫をしていたと思う。なわとびやフラフープなど、寒さの中でも積極的に戸外遊びができた。

・朝や帰りには戸外で遊ぶなかで、友だちどうしの関わり方を自分たちなりに考えることができていたのではないかと思う。

・戸外で体を使って遊べるよう、一人ひとりの能力に合わせた動きができるものを考え準備した。繰り返し楽しく取り組むことで、うまく体が動かせるようになってきた。また、集団遊びが苦手な子どもも、少ない人数のなかで、無理なく自分のリズムで参加でき、少しずつ友だちとの関わりも見られ

ている。

・グループで1つの作品を作り、それで遊ぶことを楽しんだ。協力して声を掛け合い、分担しながら作る姿に成長を感じた。

・勝負に負けても、気持ちを切り替えたり、相手を思いやったりできるよう、何度も繰り返しゲームや遊びを行った。前向きな気持ちになるような声掛けをしたり、一緒に応援したりしたところ、少しずつ負けても切り替えて相手を認めることができるようになっていった。

・一人ひとりがやりたい遊びを見つけ、遊び込む姿が見られた。

・音楽会では自分がやってみたい希望を聞くことで、最後までやり抜く責任感も芽生えたようだった。

・多い人数の子どもたち、一人ひとりに向き合おうとしている先生の姿が印象的であった。

・友だちどうしの関わりのなかで、トラブルへの対応の仕方や友だちを受け入れようとする姿は、教師の関わり方から学んだものであろうと思われる。

・子どもたちの人数が多いことを踏まえて保育内容を工夫したり、活動の流れがスムーズに行えるよう連携したりしており、各行事のまとまりも見られた。音楽会では人数の多さを生かした声量があり、丁寧な指導で表現力も向上し、一人ひとりのがんばりが見られた。

・参観日で行ったゲームをその後の保育でも取り入れ、繰り返し遊ぶなかでやり方やグループを変えるなど工夫して楽しめるようにしていた。

・行事では人数が多いことを生かした見せ方が工夫されていて、一人ひとりの良さを引き出せるよう配慮されていた。

・子どもが疑問に思ったことを自分で考えていけるような受け答えやことばがけがされていた。

## 6. 重点的に取り組む項目の達成及び取組状況<年長児>

### 《重点目標》

自分で考えようとする力の育ちを認め、達成感を味わえるように配慮する

評価項目	達成率
① 神の配慮や恵みを伝え、感謝する心を育てようとしている	93→82→79
② 指導計画は幼児の興味や関心、これまでの生活のようす、予想されるこれからの生活などを考慮して作成している	81→82→88
③ 自分の保育と計画の評価・反省を行っている	70→89→79
④ 個人の発達特性、発達の課題に応じて指導している	85→85→88
⑤ 生活や遊びの中で、頑張ったり、我慢したり等の豊かな心の体験が得られるようにしている	81→92→96
⑥ 周囲の環境に対して、積極的に関わり、感じたり、考えたりする取り組みを行っている	74→89→83
⑦ 一人ひとりが安定感を持ち、友だちと協力したり、思いやったり、助け合って生活できるようにしている	85→85→92
⑧ 絵本や物語等を使って、想像力やことばに対する感覚を育てている	96→89→100
⑨ “一人ひとり”と“みんな”の関係を常に考えながらかかわっている	74→82→88
⑩ 幼児のささやかな成長が理解できて、それを喜ぶことができる	100→100→100

### ○取り組み状況

- ・参観日では今までにあまりかかわりの持てていなかった「友だちの保護者」とのふれあい活動を取り入れ、親子それぞれに新しい発見ができるよう工夫されていた。
- ・小学校へ向けての意識が持てると同時に、残りの幼稚園生活も楽しんで過ごせるようなことばがけや関わりがされていた。
- ・なわとびの活動では、互いに教えあい、上達していくことを一緒に喜べる環境を用意したり、「やりたい」という気持ちが持てるようにされていた。
- ・マラソンやなわとび、ふやし鬼など、寒さに負けず外で遊び、体力向上に努めたり、体を温めながら友だちとその心地よさや気持ちを分かち合えるようにした。小学校でも意欲的に友だちと触れ合っで遊んだり、自ら遊びを提案し、なかまづくりができるよう経験を増やしてきたところ、学年全体で交流が深まり、ルールを守ったり、技を習得したりしながら活動することができた。

・1年間のさまざまな取組によって、新しいことに挑戦する意欲や喜びや自信が高まってきている。集団行動の大切さを自覚し、社会性も身につけてきており、自らの成長を喜び合っているようすも感じられる。

・音楽会での役割分担で、自分で選び最後まで責任を持ってやり遂げられたことから、自信と達成感いつながったようだった。

・戸外で他学年の友だちが楽しく遊べるように遊びを引っ張っていくようすをよく見かけた。年長児の影響は大きく、年長児と遊ぶことを毎日楽しみにしている子どもがたくさんいた。

・さまざまな経験を通して、友だちの思いを考えられるようになってきており、トラブルが起きても、自分たちで話し合っている場面をよく見るようになった。解決できないことも多くあるが、友だちと相談し、解決しようとする姿に頼もしさを感じている。

・1年間の計画を立て、子どもたちの考えを生かして1つの内容を広げて進めていけていたと思う。

・体をしっかり動かして、なわとびにも積極的に取り組んでいたと思う。

・行事の練習等に追われ、時間がとりづらいなか、なわとびやマラソンなどにも取り組み、体力づくりができていた。トラブルが起こった時に、みんなで話し合い、解決するように導いていて、子どもたちが納得できる方法を考えていることがよく分かった。



## 7. 今後の課題

### 《年少組》

- ・グループ活動を行い、友だちと関わる楽しさを感じられる機会を増やしたら、より良いと思う。
- ・個から集団へ意識が変化していくタイミングに合わせて、グループ活動を取り入れ、個からグループ、グループからクラス全体に興味関心が持てるような保育計画を今後も進めてみたい。
- ・一人ひとりの子どものようすをもっと深い部分から観察し、寄り添った援助の仕方を工夫してみたかった。
- ・子どもたちの遊びや友だち関係の幅が広がるにつれ、教師の介入のタイミングが難しいと感じ、悩んだ。
- ・障害のある幼児が生活しやすい環境の一つとして、物的環境があることにより、周囲の子どもも理解しやすくなり、寄り添うことができたようだ。今後も子どもどうしで助け合っていくことができるように配慮していきたい。
- ・食事に関しては、子どもの小さな変化やがんばりに気づき、喜びや思いに共感してきた。今後も自信につながるよう配慮していきたい。
- ・遊びを「繰り返し楽しむ」から「遊び込む」までの遊びの内容や質の向上に必要な環境と時間を考え直したい。
- ・学年に教師が複数いるので、助け合い、支え合いながら保育を分担したり、共同したりする姿勢を保っていくことが引き続き必要である。
- ・個人のやりたい遊びを十分確保することと並んで、集団遊びでの育ちを高められるよう活動に幅を持たせてほしい。

### 《年中組》

- ・1年間を通して、集団の一員としての自覚が芽生えるようはたらきかけてきた結果、みんなと心を合わせようとする姿や、友だちの気持ちをくみとろうとする姿が見られ始めているので、引き続き導いてほしい。
- ・教師間で常にクラスの様子を話し合ってきたので、バランスの取れた子どもの発達段階や、興味関心にあった保育内容を選べた。また、子どもたちを複数の目で、さまざまな角度から見ることで、人数は多かったが、安心感を持って保育することができた。
- ・友だちと協力したり、遊び続けたりすることができるようになっていた。まだまだ個人差はあるが、クラスで話し合いを行い、相手を思いやることの大切さに気づいたり、考えたりする必要があると思う。

・個人の発達の課題が明確になってきたり、個性が目立ってきたりして、クラスの枠を超えて学年・園全体への協力を呼びかけることもあった。引き続き、教師どうしで育ちを見守っていく体制づくりを必要とする。

#### 《年長組》

・行事に追われて大変そうな時期もあったが、そのなかで年長児ならではの製作や縁日ごっこなどを行っており、イキイキした表情をたくさん見ることができた。次年度もぜひ、子どもたちが楽しめることをたくさん行ってほしい。

・行事に追われ、手が足りず、他学年の先生方にサポートしてもらって前に進むことも多かった。また、相談にのってもらったり、意見をもらうことで自分を振り返ることも多かったので、とても役にたった。

・集団活動での伸びが大きく、なかまと一緒に行動し、励ましたり、褒めたり、認め合ったりしながら、一人ひとりを大切に思う気持ちが育ち、まとまっていった。遊びだけではなく、行事のなかで育つ責任感や達成感も充実させていくことも必要である。

#### 《全体》

・幼稚園教育要領を理解し、目の前にいる子どもが今、どこの領域のどの部分が育とうとしているのかを受けとめ、援助していきたい。

・どの学年も個から集団への活動というのを年度内にうまく取り入れており、子どもたちのなかにも集団で一緒に活動することの喜びや達成感、協力体制などがぐんと育っている。

・同学年どうしの教師の情報交換や、子どもの姿の伝え合いは活発であるが、学年を越えて交流したり、他学年の様子を積極的に見る機会がすくなかった。次年度以降の課題として、他のクラスの保育を見るという園内研修を行い、保育の幅を広げたり、また自分のクラス以外の子どもを知る機会として、取り入れてみるのも良いと思う。